

舞と能面の宴 *in* 仏蘭西料理貝殻亭

世阿弥の傑作、「融」豪快さと風雅さを持ち合わせた源融
月光にやさしく照らされた六条河原院の幽玄な舞台に
九世橋岡久太郎が誘います

九世 橋岡 久太郎 (観世流)プロフィール
1958年9月 東京赤坂生
能楽師 シテ方観世流(社団法人 能楽協会会員)
橋岡會代表 久習會・興萬會主催
三歳にて初舞台を踏み、八歳にはヨーロッパ七カ国にて
「菊慈童」のシテ(主役)を演じて以来、
十数カ国四十都市にて能公演を手掛け成功させている。
以後、「道成寺」をはじめ大曲、秘曲等数々の能を勤める。

600年前から続く、能より融



2009.12.5(土曜日)

会場 仏蘭西料理貝殻亭
出演 九世 橋岡 久太郎(観世流)

開場 17:30~

食事 18:00~

開演 20:00~(1時間ほど)

※当日のお食事時間に応じて若干の変更がございます。予めご了承ください。

料金 予約制 A席(26席) ¥15,000(消費税・サービス料込)

予約制 B席(26席) ¥12,000(消費税・サービス料込)

料理 コース

お飲物 フリードリンク

※当日は能についての理解を深めるトークショーと400年以上前の能面の鑑賞が楽しみいただけます。

■ 娯楽と芸術の違い

芸術と娯楽の違いはとよく言ったもので、作曲家のチャールズ・ワーグナーは、「娯楽と芸術の違いは明らかです。娯楽は努力なくとも簡単に手に入ります。芸術の場合はある程度の努力を必要としますし、それによって以前よりも多くのものを得られます」

■ 能をひも解く

歴史はシルクロードから奈良時代の始め、ペルシャ辺りからシルクロードを経由して中国に入った散楽が日本に渡ります。

散楽はアクロバット(曲芸)、マジック(幻術)、お笑いの芸(滑稽芸)の三つの要素からなります。

日本古来の滑稽芸であった俳優(わざおぎ)の芸と一緒に定着。

11世紀ころから国家の安泰を祈って寺院で行われた国家的な宗教行事に猿楽が組み込まれて行きました。

仮面を被り呪術的な芸を行う新たな猿楽の集団が鎌倉時代の末期(13世紀末)誕生「翁猿楽」とよばれこれが世阿弥たちの能の直接のルーツとなります。

・天才の出現

能の作り手として、観阿弥、世阿弥が挙げられます。

・「観阿弥」

組織の整理とメロディー中心の猿楽の謡に拍子のリズムをミックスした音曲革命「曲舞」。

観阿弥は非常に謡がうまかったようで、編曲も得意で、謡の力量や面白さが魅力です。

・「世阿弥」

父親阿弥から観世大夫を受け継いだ世阿弥は、台詞や筋書きの面白さを売り物にしていた能を、歌舞を中心とする優美な能へ転換させます。

・戦国時代の四座一流

戦国時代になると秀吉が能にのめり込みました。俸給を与えて能役者を抱えることをはじめ、この政策を徳川家康が引き継ぎました。

徳川幕府は大和猿楽の四座(よざ)「観世・宝生・金春・金剛」の役者を保護。2代目秀忠になり喜多七大夫の一流を入れた四座一流体制となる。

* 各流儀の個性

観世流・・・優美で繊細な表現が得意

宝生流・・・派手さはないが重厚で渋い味のある

金春流・・・室町以来の古風をとどめる大らかな芸風

喜多流・・・男性的な豪快さが魅力

明治維新と太平洋戦争

幕府や藩の援助をなくした能は民営化を余儀なくされ、いくつもの流派が歴史に幕を下ろした。このときの能役者の危機感がその後の時代の芸の開花に大きな力となった。

能楽堂の出現

江戸時代の末までは、屋外に設置された能舞台はが、屋内に移った。

謡も屋内の緻密な空間になって、集中力があって静かな謡を謡うようになりました。

■ さらに深く、、、公式サイト「舞と能面の宴」

www.gpi-group.co.jp



QRコードで携帯からもご覧いただけます。



新書館「能って、何？」より一部抜粋



〒276-0028 千葉県八千代市村上2091-2
www.gpi-group.co.jp

